

今週の為替相場見通し(2023年11月13日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		149.28 ~ 151.60	151.54	148.50 ~ 153.00
ユーロ	(ドル)		1.0657 ~ 1.0756	1.0687	1.0600 ~ 1.0830
(1ユーロ=)	(円)		160.20 ~ 161.94	161.88	158.00 ~ 163.00
英ポンド	(ドル)		1.2187 ~ 1.2428	1.2227	1.2200 ~ 1.2500
(1英ポンド=)	(円)	*	184.55 ~ 185.97	185.25	183.00 ~ 186.20
豪ドル	(ドル)		0.6340 ~ 0.6523	0.6360	0.6250 ~ 0.6450
(1豪ドル=)	(円)	*	96.04 ~ 97.59	96.38	95.50 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1)今週の予想レンジ: 148.50 ~ 153.00 円

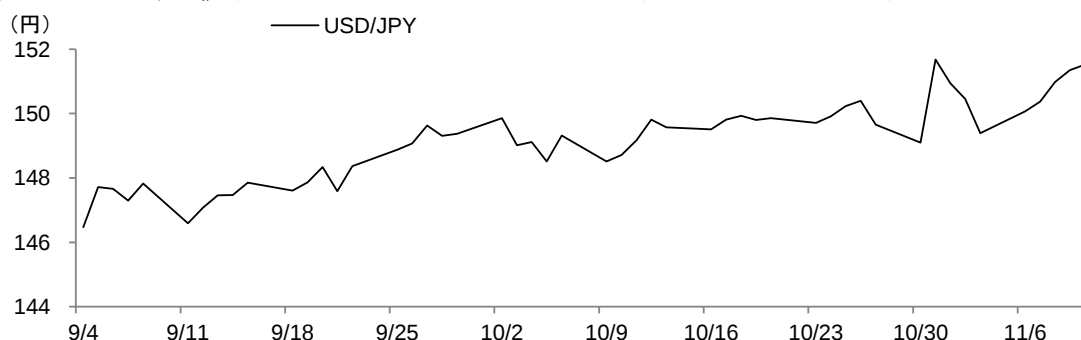
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は続伸し、週後半にかけて年初来高値更新を窺う展開となった。週初6日、149.45円でオープンしたドル/円は、前週のFOMCや予想比弱い米雇用統計をこなした材料出尽くし感からドル売りが先行し、早々に149.28円の週安値まで下落したが、日経平均の大幅上昇を横目に底堅く推移。海外時間は、植田日銀総裁のハト派発言「年内に物価目標実現を判断できる可能性は低い」、およびFed高官等のタカ派発言を背景に米金利が反発したことを受け一時150円台乗せ。7日、ドル買い相場の継続で150円台半ばへじり高。海外時間は方向感なく推移し、上値の重い展開となった。8日、米金利反発を背景に150円台後半へじり高。海外時間は米金利が低下する環境下でも円全面安となり、一時151円台に乗せた。9日、米金利上昇や日経平均の堅調推移を背景に151円台を定着させにいく展開。海外時間は、米30年債入札の軟調な結果を受け米金利が続伸する中、パウエルFRB議長による「必要であれば追加利上げを躊躇することはない」などのタカ派発言も材料視され、一時151.39円まで上昇した。10日、前日の動きを引き継ぎドル買いが優勢。時間外米長期金利の上昇一服で売られる場面があるも底堅く推移。海外時間入り後は再び米金利が上昇し、ドル/円は151.50円まで上昇。さらに、米11月シガン大消費者信頼感調査における1年および長期期待インフレがともに市場予想外に上昇したことで米金利が上昇する動きにドル/円は151.60円まで週高値を更新し、高値圏のまま越週。

今週のドル/円は当局の介入を警戒しつつも上値を試す展開を予想。月初のFOMCを終え、Fed高官の発言機会が増える中、先週はパウエルFRB議長を含めタカ派コメントが相次いだ。パウエルFRB議長による上述のコメントに加え、ゲールズビー・シカゴ連銀総裁やローガン・ダラス連銀総裁、ボウマン理事等投票権を有すメンバーからもインフレ高止まりを警戒する発言が繰り返され、引き続き高金利が維持されるとの見方が広がった。インフレ指標については、先週末に発表された米11月ミシガン大学の期待インフレ率は1年先および5~10年の長期ゾーンがともに前回から上振れるサプライズとなった他、今週には14日(火)に米10月CPIの発表を予定し、食品・エネルギーを除くコアベース(前年比)では市場予想中心値が+4.1%と前月発表分から横ばい予想。インフレ抑制の難しさが改めて意識されれば、米金利上昇を伴いながらドル買いが強まる展開が予想されよう。また、今週は17日(火)に米国の現行つなぎ予算の期限を向かえる。下院議長は延長案を発表しているものの期限までに上下両院合意に至れるかは依然不透明。先週末、主要格付け3社で唯一米国債に最高位の格付けトリプルAを維持している米大手格付け企業が、米国債の格付け見通しを現状のステイブル(安定的)からネガティブに引き下げており、週後半にかけて政府閉鎖リスクをめぐる緊張が高まれば米国債含め値動きのボラタイルな展開にも注意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/6~11/10)の値動き: 安値 149.28 円 高値 151.60 円 終値 151.54 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0830 158.00 ~ 163.00 円

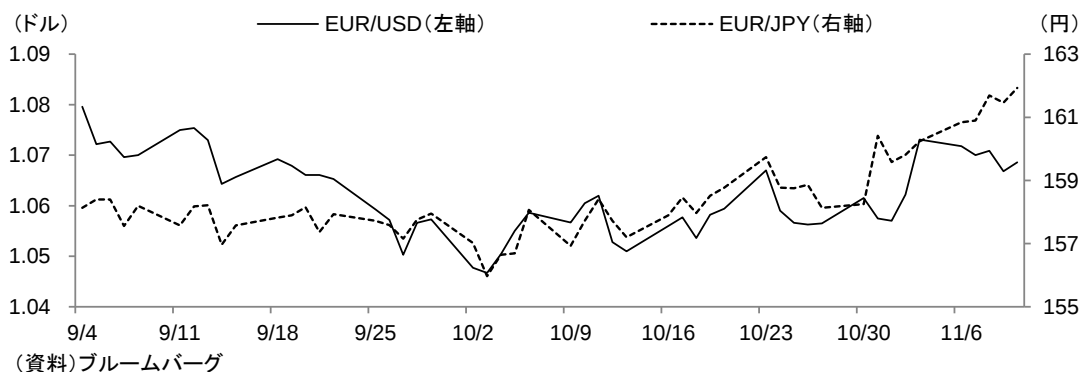
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、独金利低下が重しとなり下落した。週初6日、1.0729でオープンしたユーロ/ドルは、独9月製造業受注の良好な結果が好感され1.07台半ばに上昇したものの、米金利上昇を背景に1.07台前半に反落した。7日、ユーロ/ドルは独9月鉱工業生産の軟調な結果が重しとなり1.06台後半に続落も、引けにかけては米金利低下を受け1.07台を回復した。8日、ユーロ/ドルは独金利低下を背景に一時1.0660に下落も、欧州株高や米金利続落が好感され、1.07台に反発した。9日、ユーロ/ドルは複数のECB高官による早期の利下げ開始を強く否定するタカ派な発言を受け1.07台前半に乗せる場面もあったが、米金利上昇が重しとなる中で、再度前日安値まで反落した。週末10日、ユーロ/ドルは1.06台半ばでスタートし、独金利上昇を横目に、買いが先行。海外時間に1.0692まで値を上げるも、米金利上昇や先週の米11月ミシガン大学消費者信頼感調査の5～10年期待インフレ率の結果が重しとなり、週安値の1.0657まで反落。その後、1.0690手前まで小幅反発し、結局1.0687で越週した。

今週のユーロ相場は底堅い展開を予想する。先週は、週前半は米利上げ終了見込みを背景とした米金利低下にドル売りユーロ買い相場となるも、その後はユーロ圏9月小売売上高の軟調な結果を受けてユーロ売りとなり、また複数の米要人が相次いで米追加利上げの可能性を示唆したことで、一段とドル買いが強まり、ユーロ/ドルは週を通して上に往って来いの展開となった。ECBによる利上げの再開は示唆されていないものの、引き続き金融引き締め方針を維持すると見込まれる。FRBに関しては、14日(火)に発表される米10月CPIの結果次第で、FOMCの12月会合での追加利上げ観測がジャッジされるものの、足許で米10月CPIは弱含むと想定されており、見込み通りの結果となれば、ユーロ/ドルは底堅い値動きとなるか。今週の重要指標の発表は13日(月)独9月経常収支、14日(火)独ZEW景気期待指数、ユーロ圏7～9月期GDP(改定値)、15日(水)ユーロ圏9月鉱工業生産、ユーロ圏9月貿易収支、17日(金)ユーロ圏10月消費者物価指数(確報)などの発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/6～11/10)の値動き: (対ドル) 安値 1.0657 高値 1.0756 終値 1.0687
(対円) 安値 160.20 高値 161.94 終値 161.88



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2500 183.00 ~ 186.20 円

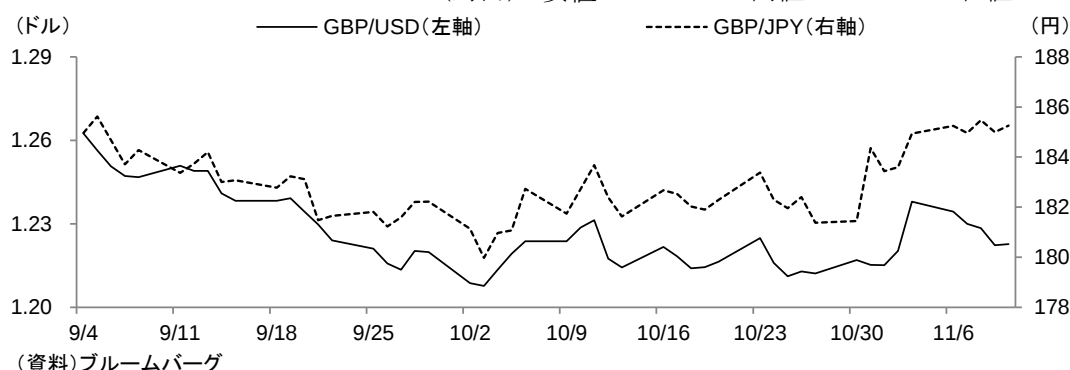
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は週初の6日こそ、先週末のドル安の流れを引き継ぐ形で対ドルで続伸したものの、その後はドル高・ポンド安に押し戻される格好となった。対円では底堅く推移した一方、対ユーロでは下落しており、英国で発表された経済指標が市場予想を上回ったことはさほど材料視されなかった。英国国家統計局(ONS)が10日発表した2023年7~9月期の実質GDP成長率は前期比横ばいとなった。市場予想では前期比▲0.1%が見込まれていた。ただし、内訳を見ると、個人消費、企業投資、政府支出の主要項目が全て減少する一方、貿易収支の改善によってマイナス成長を回避した形であり、イングランド銀行(BOE)の金融引き締めによって、英経済にブレークがかかっていることには変わりがない。今回のGDPの結果は、BOEの利上げ局面は終了したという市場の見方を改めて補強するものと言えよう。BOEのチーフ・エコノミストのヒュー・ピル氏は9日の講演において、インフレ抑制のため金利をこれ以上引き上げる必要がなく、政策は既に十分に景気抑制的だと語っている。

今週1週間のポンド相場は賃金、CPIという重要データの発表が予定されており、データ次第の側面が強いただろう。14日(火)には労働市場関連統計が発表される。7~9月分の週平均賃金が最大の焦点となろう。6~8月時点の英国の賃金の伸びは前年同期比+8.1%と他の先進主要国・地域に比べても高水準だが、景気減速の影響もあり、同+7.4%への減速が見込まれている。15日(水)公表の英10月CPIでは賃金の伸びの減速がサービス価格の伸びの減速に結びついているかを見極める必要があるだろう。17日(金)には英10月小売売上高も発表される。今週は外部要因も英ポンドに影響を与える公算が大きい。特にユーロ圏や米国では、財政を巡る動きを意識する必要があるだろう。米国では、つなぎ予算が執行して政府機関の閉鎖につながりかねない17日を間近に控える。欧州では、EU財政ルール改革に向けた議論が再び焦点となろう。経済データでも、14日(火)発表の米10月CPIを始め、為替市場への影響度の大きいデータ発表が控えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/6~11/10)の値動き: (対ドル) 安値 1.2187 高値 1.2428 終値 1.2227
(対円) 安値 184.55 高値 185.97 終値 185.25



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 0.6250 ~ 0.6450 95.50 ~ 98.00 円

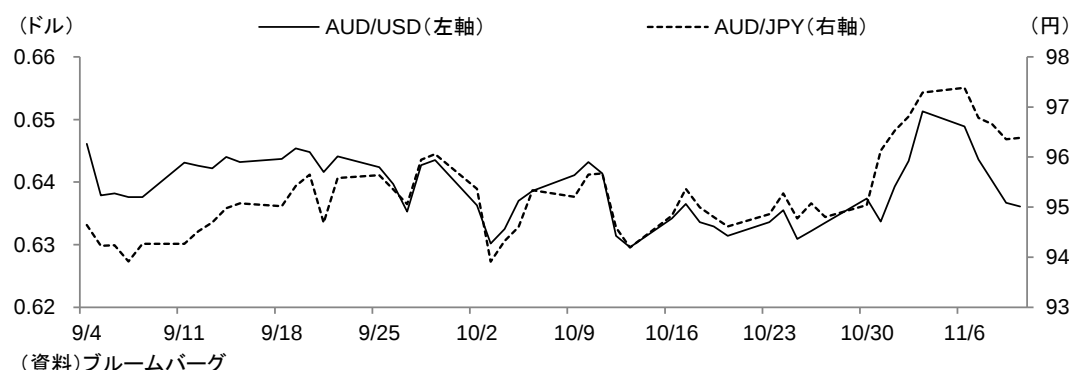
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは下落した。週初豪ドルは0.6510近辺でオープン。NY時間に入り米金利が1週間ぶりに上昇する中、ドル買いが優勢となると豪ドルは0.6490近辺まで下落して引けた。7日はRBAにて+25bpの利上げ決定を発表。発表直後は僅かに0.65台へ乗せたものの、直近のCPIが見通し程軟化していなかった事等を背景に金利市場では11月会合での利上げを織り込んでいた為sell the factの動となり0.64ちょうど近辺まで下落した。NY時間には米金利は上昇し、ドル買いが先行した事も豪ドルの重しとなったが、引けにかけて米株が小幅に上昇した事で、豪ドルは僅かに値を戻し0.64台前半で引けた。8日、0.64台前半でオープン。NY時間では、米10年債入札を受けて利回りが低下した事でドルが軟調に推移し、豪ドルは0.64台を維持した。9日、豪ドルは0.64台ちょうど近辺でオープン後、0.64台前半で推移。ただ、NY時間に米30年債入札が低調だったことやパウエルFRB議長のタカ派発言に、米債利回りが急上昇しドル買い優勢となると豪ドルは0.64台を割れ0.63台後半で引けた。9日、0.63台後半でオープン後、NY時間に発表された米11月ミシガン大学期待インフレ率が市場予想を上回ったことを受け米金利上昇、ドル買いが強まるも週末を控え下値は限定的となり0.6360で越週した。

今週の豪ドルは引き続き軟調な推移を予想する。先週のRBAではコンセンサス通り利上げが実施されたものの、マーケットでは既に織り込まれていたこともあり、会合後は調整の売りが強まった。ブロックRBA総裁発言では今後の利上げはデータ次第と述べたものの、ハードルの高さも示唆し追加利上げの思惑が後退した。一方、米10月雇用統計の軟調な結果を受けFRBによる年内利上げ観測は後退していた中、先週パウエルFRB議長は「適切なら金融政策の引き締めを躊躇しない」と発言。この発言を受け年内追加利上げを見極める上で、14日(火)に発表される米10月消費者物価指数への注目は高まっている状況。足許、米金利の反発にドル買いが強まる中、結果次第では一段とドル高圧力が強まるだろう。また、今週は15日(水)に豪7~9月期賃金指数、中国10月小売売上高、16日(木)に豪10月雇用統計等の指標の発表を控えている。豪州の賃金指数や雇用指標の結果次第では12月のRBAでの利上げ織り込みに豪ドルが反発する展開も予想され、注意したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/6~11/10)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。